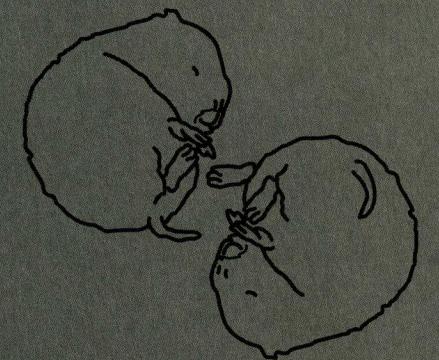


# 生きもの 博物誌

【コタケネズミ】  
ミャンマー



## コタケネズミと焼畑民

竹田 晋也  
(たけだ しんや)

京都大学アジア・アフリカ地域研究  
研究科准教授

竹の稈(中空な茎)のなかを登つていった。節をひとつひとつ破つて登り詰めることにはもう太陽が昇つていて、最後の節を破つて顔を出したら、太陽のまぶしさで目がくらみ墜落してしまった。それ以来、ブイは土のなかで暮らしつつもよく見えなくなってしまったそうだ。オオタケネズミの場合には、実際に竹をよじ登ることがあるらしい。そのときに稈の表面をかじるので、それがフィールドサインになつてオオタケネズミがいることがわかる。またタケネズミ類の小さな目は、土中で生活に適応したものだ。

## 賑やかな休閑地

焼畑耕作や野火による攪乱がくりかえされてきた東南アジア大陸山地では、竹の多い二次林、あるいは竹林が広く見られる。山棲みの人びとは竹林に焼畑をひらいで陸稻を育て、次の年には休閑する。するとすぐさま竹が回復して数年も経つとまた焼畑がひらけるようになる。人びとは竹の旺盛な回復力を利用して生活を営んできたのである。

ミャンマーのヤンゴンとマンダレーのあいだに横たわるバロー山地でも、カレンの人びとが竹の多い二次林で焼畑を営んでいる。休閑地にはチャタウンワ (*Bambusa polymorpha*) やタイワ (*Bambusa tulda*)などの竹が多い。

こうした竹林を歩いてみると、地表を掘り起こした土盛りが一面に広がっている。これは、カレン語で「ブイ、」

ビルマ語で「ブイ」とよばれるコタケネズミの仕業である。巣穴の入り口には、掘り出した土が盛り上がりついている。コタケネズミはそこから土中を掘り進み、一定の間隔で土を地上に掃き出しているのである。こうして竹の根やタケノコを食べ、土のなかの果実で繁殖している。イノシシが地面を掘り起こした跡も加わって、特に若い休閑林の林床はまるで耕されたようになつている。こうした動物の耕耘力は、休閑地の地力回復に大いに役立つている。休閑地というと静謐な場所を思い描くが、実際には動物が活躍するすいぶんと賑やかな世界である。

**コタケネズミの昔話**

一月の満月が森を照らす夜に、カレンの村でこんな昔話を聞いた。

「むかし、ブイ(コタケネズミ)は田まで行く」として、

カレンのような焼畑民にとってコタケネズミは大切なタンパク源となつていて。カレンの村の周囲は、水源や薪炭材を確保するために森が保たれている。その森のなかの沢の土手にコタケネズミの巣を仕掛けていた。チャタウンワの竹筒のなかに餌となる竹の根を入れて、その周囲に糸を投げ縄のように仕掛け土のなかに埋める。糸の端は地上のしならせた小枝に縛つておく。コタケネズミが餌を食べると止め金が外れて、土のなかから竹筒に体を突っ込んだコタケネズミが釣り上がってくる。

コタケネズミの体長は二〇センチメートルほどで、動きは思つたほど素速くない。土を掘り進める手足はとても短い。追い詰められると、鋭い門歯を見せて「ジ」と音を立てて威嚇する。この鋭い前歯と短い手足で森を耕し、村人の日々の食卓を飾り、ときには祈りのために供犠されてきたのである。焼畑の攪乱が竹の多い二次林を生み、コタケネズミはその竹林を耕して棲息地を拡大してきた。森で焼畑耕作を営んできたカレンの人びととその焼畑の森を耕しててきたコタケネズミとのつきあいは、深くて長いのである。

## 森を耕すコタケネズミ

チャタウンワの竹筒を使った罠を準備する

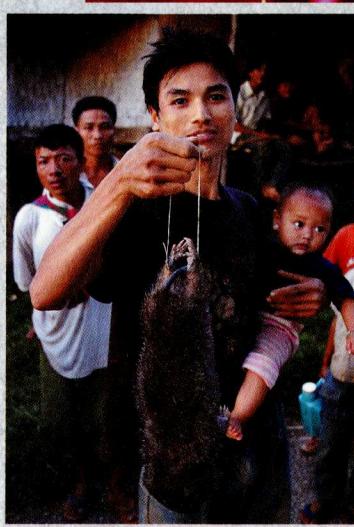


竹筒のなかに竹の根をいれて餌とする



休閑地に生えるチャタウンワ。  
稈は、竹皮に覆われている

体長は20センチメートルほどだ



ラオスのルアンパバーン県で売られているタケネズミ類。オオタケネズミあるいはシロゲタケネズミと思われる



### コタケネズミ (学名: *Cannomys badius*)

コタケネズミ (Lesser Bamboo Rat) は、体長15~20センチメートル、体重0.5~0.8キログラムで、ネパール、アッサム、バングラデシュ北部、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナム北部に分布する。前頭に白斑があることが多い。アジア東部に分布している他のタケネズミ類 (タケネズミ亜科 Rhizomyinae) には、オオタケネズミ (Large Bamboo Rat, 学名: *Rhizomys sumatrensis*)、シロゲタケネズミ (Hoary Bamboo Rat, 学名: *R. pruinosus*)、タケネズミ (Chinese Bamboo Rat, 学名: *R. sinensis*) がある。

